津島佑子

講談社

我が父たち

昭和五十年四月八日　第一刷発行

著　者　津島佑子

発行者　野間省一

発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一／郵便番号一一二
電話東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）／振替東京三九三〇

印刷所　信毎書籍印刷株式会社

製本所　大製株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

© Yuko Tsushima 1975, Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。　（文1）

目次

壕のなかの子ども　7
火屋　85
我が父たち　161

裝幀司　修

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

我が父たち

壜のなかの子ども

男の日常で一番の楽しみは、夕方、近所の大学病院に行き、その裏庭に人眼を避けて飼われている動物たちに会いに行くことだった。生体実験を受け、今は用済みになった畸型の動物たちだった。

十日ほど前、散歩の途中に偶然そこを見つけたばかりだったのだが、続けて訪れるうちに、その時が夜九時の閉店の時間よりも夕飯の時間よりも待ち遠しくなり、家族の者には秘密にし続けていたせいもあり、思い浮かべるだけでも心のはずむ息抜きになっていた。もともと動物好きではなく、息子が犬を飼うのも禁じているくらいなのだが、ことごとく人間に嫌われる様相を示している無気力な動物たちをビスケットでてなずけること、この表面的には矛盾した行為に、男は強い執着を覚えたのだった。三日目にはすでに、動物たちも彼を見憶えていた。

楽しみが心のなかを大きく占めていくにつれて、男の家族への警戒心は強くなっていたのだが、秘密というものはそういつまでも続くものではないらしい。まして、彼は自分の店から無断で毎日ビスケットを持ち出していたのだから、遅かれ早かれ、妻か息子の不審をかうことに

なるのに決まっていた。店の品物に関して彼は几帳面すぎるほどで、妻と息子にもケースのなかの商品を常に一定の量にしておき、行儀よく並べておくように教えこんでいた。また、子どもの客にたとえ一個十円のガムでもおまけに与えたことなどない。商品が少しでも減れば、すぐに見破れる仕組みになっているのだった。

その土曜日、男は店先の息子に邪魔されて、いつものココナッツ入りのビスケットに手が伸びず、否応なく砂糖つきのアルファベット型のビスケットを持参せざるを得なくなった。ビスケットの違いなどにはさほどこだわらずにすむが、二日前から息子がこの秘密を嗅ぎつけてしまっているらしいのが、なによりも不吉でいまいましかった。——

ゆうべの雨のせいか、そこに淀んでいる嗅ぎ慣れた動物たちの体臭は、辺りを浅黄色に染めつくすような草いきれに混じって、喉を刺激するアンモニア性の異臭に変わっていた。濡れた地面は含んでいた汚れをすべて吐き出すのだ。動物たちは小舎を持っていない。昨夜も、いなびかりを伴った雨が降り続いている間、背に流れる水の重みに負けまいとして、まばたきもせずにじっと立ちつくしていたのにちがいない。猫たちなどは低い唸り声を途切れ途切れに響かせながら、丸めた背中を震わせ続けていたことだろう。が、そうした疲れを示しているものは一匹もいなかった。

他の場所に飼われている健康体の仲間より、この動物たちは不思議に強い体を持ち合わせて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いるらしい。そして、誰よりもまず彼ら自身がそれを悟っていて、人間が自分たちの様子を見に来るたびに恥入り、風邪もひかない頑強さにどぎまぎしているように見えた。お望みのように、わたしたちだって一日も早く往生してしまいたいのですが、なかなかそうもいかなくて——とでも言うように、哀れっぽく鼻を鳴らしてみせる。いかにもお前たちらしいじゃないか、と男は彼らと眼が合うと、いつも心のなかで呟き、その汚れきった頭を撫でてやらずにはいられなくなる。それだけでもすでに一仕事終えたような充足感を得るのだった。

そこには山羊が二匹、うさぎと犬が数匹ずつ、猫が七匹、そして赤ん坊に乳を含ませている雌の猿までがいた。子どもなら即座にそこを動物園に見たててしまうだろう。だが、それぞれ檻に閉じこめられているわけでもないのに、彼らは互いに無関心で、じゃれあうことをしないし、鳴き声も滅多にたてない。淀んで動かぬ体臭のなかで、影のように朦朧と佇んでいるだけなのだ。

つまり、この場に見捨てられてしまった我が身の前世の思い出に浸りこんでいる風情であり、男は傍でそれをあれこれ推量してみるのにも飽きなかった。合わせて、自分や自分の家族の前世の姿を戯れに思い描いてみることもあった。自分に前世があったとは到底実感できないのだが、産まれて八年経つ息子に思いが及ぶと、まるで知恵の輪を解く鍵をそこに見つけたような適切さを感じた。あいつの霊は決してこの世にはじめて迷い出てきたのではあるまい。い

つ、どのような現世を過去に見てきたのかは知らないが、親より達観したあの眼つき、口調も、そう考えれば納得がいく。少くとも、動物たちを眼の前にしている限り、男はそうした非現実的なことを信じていることができた。

その日も、なじみの深い男の姿を見つけると、動物たちは挨拶というわけでもないのだろうが、もの憂げに微かな呻き声をたてたり、前脚で土を掻いたりしてみせていた。眼のつぶれている三羽のうさぎは彼の姿が見えないうちから敏感に足音を聞きつけ、泥と草の汁がこびりついている耳を揃えて立てて待ち構えていた。山羊は首を左右に振り、喉に垂れ下がっている乳房状のこぶを揺らして、男を迎えた。

が、最も積極的な歓迎を見せたのは、腰がくの字に曲がっている黒犬だった。傍の草叢に坐った男にぎごちなく駆け寄り、尾を振る代りに尻を勢いよく地に叩きつけながら、上眼遣いで見つめ続ける。その犬ははじめて訪れた日から必要以上の媚と愛敬を示し、男を当惑させていた。この類いの表情は毛並みが美しく、充分人間たちに愛されている動物たちでなければ似合わない。

いつもと同じように、男は上着のポケットに詰めこんできたビスケットをまず一枚、黒犬に投げ与えた。彼の顔を眩しそうに見上げてからビスケットをくわえ、神妙に犬が引き退がっていくと、次の番は当然自分たちだとばかりに、母親猿が赤ん坊を胸にしがみつかせたまま、足

もとに擦り寄ってくる。二匹とも全身の毛がすっかり脱け落ちていて、灰色の地肌が鱗のように光っている。男は、まだ乳しか吸えない子猿も勘定に入れて、二枚のビスケットを黒い蠟細工のような掌に置いてやる。MとKの形だった。

——そら、次はお前だったろう。

——ばかだなあ、お前の分はそっちに投げてやったじゃないか。

一人で呟きながら次々動物たちにビスケットを与えはじめると、男は前の日までと変わらない快感に浸っていくことができた。いいぞ、その調子、という満足げな声が、そこに着くまで落ち着かなかった体を充たしていった。相手の動物たちの反応が冷淡で緩慢であればあるほど快感は増すのだが、それもいつものことだった。

——そんなまずそうに食う奴があるか、あしたからやらないぞ。

——なにしてるんだ。早く拾え。

——もう一枚欲しいのか。だめだめ、余分はないんだ。

ところが、この調子で続け、ポケットのなかのビスケットの量が半分ほどに減った頃、男は背後の盲目のうさぎたちをふと振り向き、その様子に驚かされた。うさぎたちは鼻先のビスケットのにおいを熱心に嗅ぐだけで、いつまでたっても口にくわえこもうとしていない。あわてて周囲を見直すと、同様にアルファベット型のビスケットに疑いを見せているものが幾匹もい

る。余分な枚数を欲しがっていたのは、猿の親子だけだったのだ。
男はきょうの楽しみまで、すでに打ち壊されているのを認めざるを得なかった。改めて、店で見張っていた息子の眼を憎んだ。あの時、毒々しい色砂糖のついたビスケットにためらいながら手を伸ばした父親を見て、息子はさぞ勝ち誇った気持になっていたことだろう。今頃、父親のうろたえぶりを思いだしては笑っていることだろう。
未練がましく、男は地面のビスケットを拾いあげ、うさぎの口に押しつけてみた。うさぎは後脚を跳ねて、大慌てで彼から逃げ去って行く。他のうさぎたちにもその怯えが伝わり、仲間の足音を追って逃げだした。男は口を開けたまま、それを見送った。
息子の監視は、はじめてのことではなかった。しかし、男はつとめて無視し続けていた。なんといっても、まだほんの子どもなのだ。父親のすることを悪意に解釈するはずがない。そう彼は自分に言い聞かせていたのだった。
小学校から帰ると店が閉まるまで、息子は仕事の手伝いをするわけでもないのに店先にうろついている。が、大抵はレジの前に坐っている母親のまわりから離れず、夕方の買物にも従いていくことが多いので、ビスケットを盗みだすのはさほどむずかしいことではなかった。
息子が買物に従いていかない時は、
へお前は奥で遊んでろ。お前なんかがここに突立ってるから、来る客も来なくなるんだ。なん

だ、その顔は。自分が客寄せになるとでも思ってるのか〉

と言って店先から追いやってしまえば、その間にビスケットを好きなだけ手に入れることができた。といっても、せっかく自分が仕入れてきた商品に手を出すのにはやはり抵抗があり、ほぼ動物たちの頭数しか盗みだしていなかったのだが。

二日前の夕方も、妻の留守中、息子を叱りつけて奥の部屋に追いやってから、一人で悠然とポケットにビスケットを詰めこみはじめたのだった。が、ふと、飴玉の大きな壜の向こう側に、飴玉にしては光り方が鋭すぎる黒い二つの玉が浮いているのを見たような気がした。気が咎めるあまりの錯覚かと思いながらも、男はおそるおそるその壜に声を掛けてみた。

〈お前か、そこにいるのは〉

答はなかった。念のため、奥の部屋を覗くと、息子はテレビも見ずに、プラモデル作りに熱中していた、あるいは、その振りをしていた。自分を疑い深げに見つめている父親に気づくと、彼は臆面もなく笑顔を見せ、無邪気に言ってのけた。

〈ここんところの車輪がどうしてもまわるようにならないんだ。お父ちゃん、ちょっと見てくれない？〉

そして、そら豆の形に似た大きな頭を傾け、でこぼこに膨らんでいる父親の上着のポケットを見据えた。息子の口調はごく自然だったし、まわりの散らかしようもいつもの通りだった。

作り方の書いてある紙は膝の上に、プラモデルの入っていた箱は踏みつぶされて傍に転がっていた。それで、男は壜の向こうに見えた眼のことは忘れることにした。

しかし翌日、息子は買物に行く母親に従いていったのだが、帰ってくるなり、まず父親のポケットを見、次にビスケットのケースを振り返り、そこではじめて納得したように、下唇を噛みながらうれしそうな笑いを浮かべたのだった。今度こそ、自分の思いすごしではないようだった。なにも言わずただ笑い続けている息子の小さな体に悪意が踊りだしているのを感じた。これでやっとしっぽをつかんでやったけど、どう料理してやろうか、とでも呟いているようで、その一瞬、男は自分の盗みを恥じることは忘れ、息子を呪った。が、十分も経たないうちに、息子はどう見ても屈託なく奥でテレビを楽しんでいるし、母親に答えている言葉もいつもと少しも変わりなく、彼の懸念は曖昧なものにならざるを得なかった。

その夜更け、枕もとに豪雨の響きの波が襲ってきた。いなびかりの金属的な光が遠くで点滅するネオンのように、閉めきったカーテンを外側から時折浮かびあがらせていた。その雨を避けることのできない動物たちを思うと、男にとって柔かい蒲団は途端に寝苦しいものになり、なにも気づかず安心しきって眠り続けている息子と妻がいとわしくなった。

朝を迎え、店先に出ると、動物たちの様子を見届けないまま、とても夕方までいつもの退屈な時間を過ごす気持にはなれなかった。しかし、その日は土曜日で、息子は十二時を十分も過

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com